

近

mschi

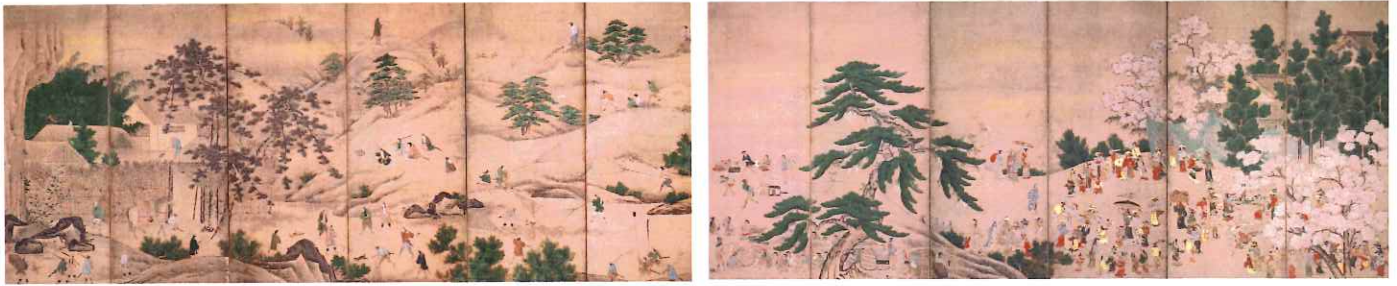
宗教は奇蹟なり

宗教と奇蹟は切っても切れない関係にあることは、昔から幾多の文献によっても明らかである。もし奇蹟のない宗教でありとすれば、それはもはや宗教とはいわれない。何となれば奇蹟は神が造るのであつて、人間の力では一個の奇蹟も造られ得ないからである。故に奇蹟のない宗教は宗教としての存在価値はないわけである。ただ、形式だけがいかにかに宗教的であつても、それは宗教的価値を喪失しているといつてもいい。

以上の意味において偉大なる宗教ほど奇蹟が多く顕れることは当然である。奇蹟とは換言すれば予期もしなかつた利益が現れることである。それによつて衷心から信仰心が湧起し入信し不幸から救われる。これが真の宗教でなくて何であらう。百の理論よりも一の事實に如かないことはいまさら言う必要はない。今日の世相は、敗戦による結果とはいいいながら、社会悪の激増は勿論、特に将来の日本を担うべき青年層が不健全なる思想に禍いされ混乱裡にある事實は寒心に堪えないものがある。その原因を衝けば唯物思想を金科玉条として教育された結果で、この誤謬に目覚めない限りとうていこの問題は解決

され得るはずがない。しからば唯物思想を打破するにはどうしたらよいかというところ勿論宗教心に目覚めなければならぬが、それには根本として見えざるころの神を認めしむることは常に吾らが唱導するところである。とすればその方法はただ奇蹟あるのみである。奇蹟とは勿論人間業では不可能とされたものが可能となり、理論では絶対解釈ができない事実を眼の前で見せられるとすれば、いかなる疑惑も一遍に煙散夢消するのは当然である。

故に標題のごとく「宗教は奇蹟であり奇蹟は宗教であり」と言い得るのである。したがつて奇蹟によつて神の存在を認識せしめ、唯心思想を育む以外、平和日本建設も社会悪追放も、予期の成果は挙げうるはずはない。人文史上、本教くらい奇蹟の多い宗教は未だ見聞したことはあるまい。この意味において世界の大転換期に当たつて、唯心的魂を喪失した世界に対し奇蹟の息吹きによつて、眠れる魂を揺り動かすのが本教の目的である。万能の神は、観世音菩薩またの御名光明如来の御手を通じて、自由無碍なる御活力を駆使し、多々ますます奇蹟を示し給ひ、本教を機関として、救世の大業を行わせ給いつつあるのである。



重要文化財 花見鷹狩図屏風 伝 雲谷等顔 桃山時代（16世紀） 六曲一双

MOA美術館所蔵

向かって左隻には「武家の鷹狩」を描き、右隻には「庶民の花見」を描く遊楽図屏風の一つである。両隻ともに水墨を基調として表現しているが、花見図が金箔や色彩を多く用い華やかさを出しているのに対し、鷹狩図はあくまで水墨画的であり、主題・色彩ともに左右対照の妙を見せている。慶長期（1596～1615）に描かれたこの種の初期風俗画の多くは、狩野派の画人の手になるものであったのに対して、本図は、樹木や岩組に見られる筆法や風景構成から、雲谷派の祖、雲谷等顔（うんこくとうがん）（1547～1618）の筆とされる点で注目に値する。等顔は、雪舟の画風に傾倒して個性的な水墨画形式を創造し、雲谷派の基礎を築き上げた桃山時代の代表的画家だが、当時の画壇においては保守的存在と思われる等顔が、時代の趨勢にも無関心でなかったことを示す作品といえる。

《目次》

み教え	2
代表挨拶	4
九州合同月次祭	11
感謝奉告 古賀	12
感謝奉告 古賀	13
春の芸術祭(箱根)	14
春季大祭(熱海)	15
春季大祭(京都)	16
感謝奉告 阿南	17
シリーズ明主様(14)	18
聖地NOW	20
連載『令和の平安郷建設』	23
シリーズ『幸せの種まき』	26

表紙
春色染まる石雲台

《令和6年 信仰課題》

浄霊の 奇蹟なくして今の世に

神さとするものあらじとぞ思ふ

【実践の誓い】

- 1 み教え集『明主様に倣いて』を拝読し、み心とお姿に倣います。
- 2 周囲に礼を尽くし、感謝と報恩に努めます。
- 3 浄霊を取り次ぎます。

代表挨拶

西村 正資

聖地瑞雲郷に、桜が咲き、心なごむ季節が訪れました。当初発表された開花予想より少し遅れましたが、春の聖地祭典に合わせた嬉しい開花となりました。

明主様の愛に包まれ、観桜を愉しむ幸せを満喫させていただき、感謝の日々を過ごしております。

皆さまの地域ではいかがでしょうか。

四月一日箱根光明神殿では『春の芸術祭』、熱海救世神殿では『春季大祭』が、厳粛に執り行われました。

春の陽光が降り注ぐ瑞雲郷には、アメリカ、タイをはじめ全国から大勢の参拝者が来聖されました。

自然災害、人災による苦しみの中にある皆さまの安寧を祈らせていただくと共に、大自然の恩恵をいただく我が身の喜びと感謝をお捧げしました。そして、心豊かな精神文明世界、健富和の理想世界創造を願われる明主様のご神業に参加させていただき、さらなる精進に努めることを、共々にお誓い申し上げます。

『道』三月号（70号）感謝奉告に学ぶ

一宮グループのAMさんです。

一宮グループに、可愛い信仰仲間が誕生いたしました。おめでとうございます。

この春、小学四年生になったNG君です。祖母のSさんは、五年前から帯状疱疹を患い、母親は二〇年前から難病の皮膚疾患を抱え、ご苦勞をされつつお勤めに出ているらしいです。

今年の正月、G君が突然「お母さんにも、おばあちゃんにも浄霊してあげたい」と、言ったのです。検討した結果、本人の家族を思う優しさを尊く受け止め「おひかり」拝受を進めることになりました。

入信式は、二月一八日に決まるとG君は「あと何日、

あと何日」と指折り楽しみにしていたそうです。その姿が目に見え、こちらまで嬉しくなりました。

感動的な入信式を無事終え、Sさんは「まさか孫が自ら『おひかり』をいただき、浄霊してくれるとは考えたこともなかった」と、その喜びを語っています。

G君は、毎朝七時に祖母と朝拝。学校から帰ると祖母と相互浄霊。母親が仕事から帰るとご浄霊のお取り次ぎが日課になっているようです。

幼い頃から、お母さんや祖母がご苦勞をされている姿を目にし、小さな胸の内で心を痛めてきたのでしよう。自分も「家族の役に立ちたい」と真剣に考えた末の「おひかり」拜受だったのでしようね。

G君にとつて、この優しさが、きつと今後の人生の運命をも切り開き、^{ゆたか}裕さを許されていくものと信じます。祖母の帯状疱疹、母親の長い皮膚疾患、その長く耐えた辛いご苦勞は、明主様の信仰によって、次世代に素晴らしい結実となつてもたらされたのではないでしようか。

私たちは、眼前の苦しみのみについ氣を奪われ、一喜一憂することがよくあります。しかし、信仰させていただく中での苦勞や苦しみは、靈的くもりが徐々に解消されていくのですから、決して無駄にはならないとみ教えにいただいています。そのくもりの浄化が動機となつて、眼前の苦しみとは別の悪因縁が消え、そこで恵みを許されるということも多いのです。ですから、いかなる場合もそのことを信じて、心に絶えず希望の明かりを灯し、

参拝、浄霊、奉仕の基本行を大切にしていって前進を心掛けていけば、いつか必ず人生の一隅に新たな光明が輝き始めるのだということを、この体験談から学ぶことができました。

お世話人のAさんはG君の姿に心が熱くなり、心の底から「皆に幸せになつていただきたい」と、お世話への想いをさらに強くされています。今回のようなことは、まさに「世話人冥利に尽きる」ということでしょう。人は誰かのお世話を受けているうちは、どこまで行つても信仰半人前。他人さまのお世話をさせていただくようになって、やつと一人前ということではないでしようか。すべてのお世話行が決して報われる訳ではありません。苦勞の方が多いかもしれませんが、今回のような感動に出会うと、他人さまのお世話が如何に尊いことなのかを肌で感じ、さらに情熱が高まりジツとしてはおれなくなるものです。良かったですね。今後もよろしくお願いいたします。

徳島グループのSKさんです。

四〇年前、夫人が知人宅へ伺つた後「この神さんが良から入りたい」と言い、夫婦で入信されたそうです。

四年ほど前、その夫人が仕事上の人間関係から体調を崩し、自宅で養生をされるようになりました。

昨年七月、Sさんがたまたま休みで自宅にいたところ、夫人が急に震えだし、熱もあつたということで救急病院

へ行つたところ、重症の「熱中症」と診断されました。厳しい症状の中にも延命治療を希望せず、明主様へのご祈願とご浄霊の取り次ぎを毎日続けました。

その後、病状は一進一退、転院等もありましたが、次第に落ち着き、今では施設に移り、歩行訓練に励むまで回復しました。Kさんは、暖かくなったら自宅で生活をと、希望をもって看病に励んでいらつしやいます。

振り返れば、日中、Kさんは仕事に出掛け、夫人は一人で留守番ですから「もし、一人だったら」と考えるところを「命をお救いいただいたのだ」と気付き、感謝されています。まさに、その通りですね。「信仰しているのに何故こんなことになるの」とは考えず、起きた事象の中で護られていることに心を向け「感謝」されています。その感謝が、次の「感謝」の流れを呼び込むことになるのですね。

ここまで回復できたことに、グループの方々のご祈願や遠隔浄霊等のお蔭と感謝され、「妻が心から信仰してきた世界救世教があったからこそ、心強くこれまで頑張れた」と、明主様に感謝されています。

皆、何気なく出会い、意識せず触れ合っていますが、出合いは、神様の仲立ちによって結ばれているのです。多くのお蔭も、神様から人を通して運ばれるようです。

Kさんは、今後周囲の方々へのお支えを、明主様にお約束されています。是非また、感謝奉告の続編をお聞かせ下さい。

鳴門グループのMAさんです。

徳島県には、大きく三つのグループがあり、一月には県の信徒集会が計画されています。今回それぞれの代表者が集まり、その行事を信仰の実が結ばれた喜び溢れる報告の場にしようとして、今から企画と準備を始めていらつしやいます。

会合の当初、MAさんは「勉強会」と思い違いをしていたと反省されたようです。「以前の自分と全く変わっていないなかった」「人をお救いするご用にお遣いいただくために入会したのだった」と気付いていらつしやいます。そして「明主様から自分の信仰的立ち位置を教えていただきました」と、素直に受け止めていらつしやいます。自分で気付き、改める。さすがですね。み教えでは、

『実は、人を天国にあげたいと思うような人なら、自分も天国にあげられます。それで自分が天国に行きたいと思う人は、地獄に行く事はないでしょうが、天国の下の方か中有界ぐらいでしょう』（昭和28年7月15日）

と、ありますように、本教は、病氣や苦しみから逃れる。どのような場合も「命が助かる」ということが主たる目的ではありません。「天国にあがる資格を得る」ための信仰です。信仰のさまざまな理論を知ること大切でしょうが、利他愛の大切さを知り、それを行動に移し「積徳」

を行うことで、魂を天国に、引き上げていくことが大切なのですね。

MAさんは「このままでは、いつまでたっても「明主様、助けて下さい信仰」を繰り返してしまう」と、気付いき「自分が救われたい信仰から、他人さまを救う信仰へ」を目標に」と記され「この感謝文をまとめている時に、嘔吐と下痢の浄化をいただいた」と奉告されています。想念が変わると、即霊界が変わるのですね。それだけで霊層界が変わり、霊体が浄められ、それが肉体に反映され、不要となった汚物が排出し浄化されたのですね。神様は、お造りになったこの世界の仕組みを、こんなにも分かり易く見せて下さっているのです。ありがたいことですね。普段からみ教えをしつかり拝読させていただき、心にスキが入らないよう、一つ気付くことがあれば、一つの実践をさせていただきましよう。

鈴鹿グループのHKさんです。

昨年九月から、自動車製造の下請け会社に勤めました。業務担当グループ五人の内二人は、仕事の出来るリーダー的存在で、その仕事ぶりは素晴らしいものでした。半面、その方々の口調やミスをした時の叱責のキツさは並はずれていて閉口し、苦しくて頭が混乱し、精神的にも行詰ったそうです。

その頃、鈴鹿グループの信徒宅で家庭集会有り、参加されました。ご祈願の大切さを学び合い、太田先生か

ら「浄化者、お導き対象者のご祈願を皆で」と呼びかけがあり、気乗りしないまま「職場仲間」の名前を挙げて祈願したそうです。翌日、出勤すると、その二人は先週までとは打って変わり、怒らなくなっていたのです。あまりの劇的变化に、その夜先生に電話で感動の報告をしました。その後、一時職場が変わり、再度元に戻ったところ、二人のうちの一人が残っていて、何とさらにグレイドアップしたパワーリーダーとなっていたのです。心が折れそうになりながらも、み教えの「誠を込める」を意識したこと、家族が安らぎの場をつくってくれたこと、美しい聖地の写真や動画に癒されたことで、何とか乗り越えていらっしやいました。その頃に再度家庭集会有り、今度は迷うことなく、その方の祈願を申し込みました。翌日出勤すると、何とその方の姿が真逆になりました。一度ならず二度とも。感激と共に、家庭集会、そしてご祈願の尊さを重ねて学ばれました。

明主様を家庭にお迎えする集会。そして皆で心合わせた祈り。その集会に参加するだけでHさんは、大きなご守護をいただかれたのです。実は、気付いたかそうでないかの違いだけであって、霊的には集会参加者全員がHさんと同じ光、力をいただいていると思うのです。そのような場を身近にもてる私たちは、本当に幸せです。

Hさんは、今では本社勤務となり、空調の効いた部屋で叱責されることもなく、勤務できることに感謝されています。

今回の職場の試練には、大切な意味があるように思えます。み教えに

『昔から人並外れたような仕事をする者は、例外なく名刀的苦難を嘗めるものである。これを宗教上からいうと、神は使命の大きい人ほど大きい苦勞をさせるとのことであるから、むしろ喜ぶべきである』

（「名刀を作る」昭和24年）

とあり、皆さまご存知と思います。

正しい志をもつて歩む時、苦しいことに会おうことの方が何故か多くなるのです。しかし、神様が存在される限り、いつか必ず「ああ、この時のための試練であったのか」と気付き、その試練や関わった人々に「感謝できる時が必ず訪れる」と、明主様はおっしゃっているのではないのでしょうか。

Hさんには、座右の銘のような「誠」のみ教えがあります。素敵な家族もいらっしゃいます。聖地の写真を通して心の浄化をされる道も整っているようです。その上、長年の教諭生活を務めあげられた豊かな経験があります。明主様は、大きく期待され、重要な使命を許されたのではないのでしょうか。楽しみにいたしております。

東大阪グループのMYさんです。

Mさんは、八〇を過ぎた今も、日々多くの皆さまの信

仰や生活のお世話に東奔西走されています。聖地には、お世話されている方々の「ご祈願」依頼がよくあり、感心しております。

今回も、お世話をされているKMさん（八九歳）を通して、気付き、学ばれています。

Kさんは、若くしてご主人と二人のお子様を癌で亡くされているそうで、大変厳しい人生を過ごされてきます。ご本人も六五歳の時大腸癌になり、末期と診断されたそうですが、手術と共に、多くの方々のご浄霊で回復されました。

K家には、厳しい因縁が存在するのででしょうか。先祖様にとって、何としてもそのような因縁を払拭したいと願われるのは当然でしょう。そのための近道は、現界に残された子孫を通し、神様のお力をお借りするしか道はなく、その望みの綱と選ばれたのがKMさんではないのでしょうか。K家遠津御祖代々之祖等とおつみおやよのおやたちの希望の星として命を繋がれてきたのでしょうか。

舅姑を最後までしっかりと看取られ、今も日々朝拝は二階のご神前に上がり、仲間の浄化者のご守護を祈願し、み教え『明主様に倣いて』を拝読し、そこから浄霊をお取り次ぎ、そして自己浄霊。「一日を前向きに過ごすことが出来る」と、感謝されています。また、お子様を亡くされてから、地上天国祭と御生誕祭には、必ず聖地へ参拝されているようで、「もう一度箱根の参拝が許された」と、九〇歳近い今も夢と希望を語っていらっしゃい

ます。信仰の基本をしっかりと踏まえ、どこまでも前向きです。

Mさんは、Kさんをご覧になって「かわいいおばあちゃん」と表現されている意味も分かります。このような方だから周囲には、絶えず人が集まってくるのでしょうか。

Mさんも、その姿に憧れながらお世話をされています。Mさんは、亡きご主人の夢を一年ぶりに二月の命日にご覧になったそうです。物故されたブロック長さんらと楽しそうに、明主様のご用をされ、自分に向かい「あの人にも、この人にも」と、笑顔で語っていたそうです。

現界と霊界は、表裏一体の関係であり、Mさんの明主様にお仕えされる誠とお姿があればこそ、先祖様方の尊い活躍の場にもなっているのでしょうか。み教えによれば、「夢」は、

『種類を並べてみれば神夢、霊夢、雑夢、正夢、逆夢等であつて』（「夢について」昭和23年9月5日）

と、説かれています。

夢にも正邪があり、判断は慎重であるべきですが、Mさんの場合は、間違はなく霊夢ではないでしょうか。

霊界に往かれた方々は、そこで活躍の場を与えられるのは最高の喜びであり、特に明主様のお手伝いは、最高神のお側付きとしての榮譽で、ご主人はその喜びと共にご自分の存在を知らせ、一層の励ましと今後の活躍を誓

い合いたかったのではと想像します。明主様のお手伝いをさせていただく者には、祖霊様方も必死でお支え下さいます。感謝の交叉点のようです。

一途な誠と営みが、大きな渦となる

最近、導かれるように二つの催しに参加させていただきました。

三月九日、静岡県函南町文化センターで開催された「有機農業でつながる人・地域・未来シンポジウム」という講演会がありました。農水省の「みどりの食料システム戦略」グループ長・久保牧衣子氏の基調講演、伊豆地域の有機農業実施者や推進協議会の代表者等のパネルディスカッション等の会合です。

二五〇名を超える参加者が、最後まで熱心に聞き入っていました。このような講演会に参加するのは初めてで、とても新鮮に感じました。そして何より、明主様が唱えられた「自然農法」が、伊豆地区という小さな地域においても、これほど重要な関心事として取り上げられ、国の将来を左右する課題として語り合われていることに感銘を覚えました。

今回の講演会は、東方之光を九年前に定年退職した友人兵藤真一氏が中心となり、企画したものです。兵藤氏は退職後、自然農法を普及したいと、自ら畑を耕し、普及のためには行政の力も必要と函南町の議員となり、今

日に至っています。一人から始めた営みがここまで育ってきていました。驚きと共に、心から敬服いたしております。

また、伊豆大仁のMOA大仁農場内に平成二年設立された「自然農法大学校」を卒業された一般の方が、伊豆地方に移住し就農され、地域に密着した活動をされました。

次に、三月一六日、横浜戸塚区民文化センターで開催された「3・11と音楽Ⅲ」に行ってきました。主催は「新日本研究所」という団体で、東日本大震災と原発事故を機に、物質的豊かさを再度問い直し、自然を尊重し、人の心を大切にする社会を考えようと、音楽、芸術、科学、宗教、哲学、法律、経済等々に関わる有識者が集まり「信頼」という人間関係を支えとする運動体として設立されたといいました。代表の東京大学名誉教授の島菌進先生をはじめ、著名な方々が幅広く名を連ねています。この人の輪を、蔭で支えて来たのは、いづのめ教団鎌倉教会の松田妙子初代教会長です。

先生は、七〇年以上、鎌倉を中心として開拓布教に身を捧げて来られました。鎌倉周囲には、さまざまな著名人も住まわれており、布教の中で許されたご縁を長年大切に育んで来られ、今では日本の各界を代表する識者に、明主様の教えのファンを多くつくられています。明主様の思想を共有する方々を結ばれて、この度の音楽会が催されたのです。シンポジウムもありました。

震災から、何を学ぶべきか。現状はどうか。何に気付くべきか。真剣な話は、時間の経過を忘れる程でした。

いずれの催しも、嬉しさ一杯の催しでした。社会を変える素晴らしい営みも、最初は一人の誠と努力から始まっているのですね。お二方とも、明主様への一途な誠を貫かれています。見立ての良い一時的な成果や名誉心など微塵も感じません。ただただ明主様を信じ、脇目も振らぬ愚直な信仰が貫かれていることを感じました。

『尊きは 誠なりけり鉄の 巖も通す力とぞなる』

明主様は、そのような弟子がお好きなのです。明主様からの評価が、結果にしつかりと現れていました。

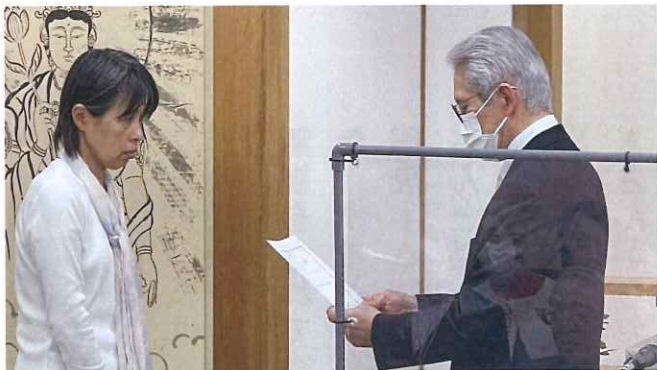
それにしても「私は果たして何を成してきたのか」。ついつい自問自答してしまいました。

私には今「明主様と聖地に直結する会」の仲間、皆さまがいて下さいます。明主様から「このチームで力を合わせ「神様の存在を心の底から信じる人」を一人でも多く生み出してごらん」と励まされているように感じました。先達や仲間を倣い、前を向いて歩ませていただきませう。どうぞよろしくお願いいたします。

浄霊実践誓う九州合同月次祭



代表よりご浄霊のお取り次ぎ



故中野芳男氏に名誉職追贈



九州担当・立石理事の挨拶



遠方の参加者にミニ花をプレゼント



各地の参加者紹介

4月7日、晴天に恵まれる中、九州はじめ広島、山口、愛知より84名の信徒が福岡県田川布教所に集い、喜びが溢れる月次祭が開催された。今年の信仰課題“浄霊の奇蹟なくして今の世に神さとするものあらじとぞ思ふ、”を確認し、浄霊実践に励み、奇蹟を通して、神様の存在を世に知らしめていくことを誓いあった。

日参を通し教えの尊さに気付く

古賀集会所 H A

私は入信させていただいて約二〇年になります。この間に様々な浄化、ご守護をいただけてきました。浄化の度に古賀集会所で長年お世話になっていらっしゃる小澤先生に「浄化は救い、明主様は必ず守ってください」と指導していただき、明主様のご守護をいただきながら二〇年が過ぎました。今では、家族全員が入信を許され、家族で集会所に参拝させていただいています。

去年の一〇月の話ですが、私の娘の浄化の事で、一ヶ月間、古賀集会所に日参させていただくことになりました。日参をさせていただくのは初めてのことでした。不安はありましたが、無事に一ヶ月間、日参させていただ



くことができました。すると、娘の浄化も少しづつ落ち着き、ご守護いただきました。そして、もう一つ、私に不思議なご守護をいただきました。私は、三年前より新しい職場で働いていたのですが、なぜか私だけをイジめる方がいました。無視された

り、陰口を言われたり、私はAさんに対して、何かをしたという事はなかったのですが、そんな期間が三年程続いていました。み教えの中に「人を裁くなかれ」とあります。私はAさんを通して神様から何かを教えていただいているのだと考え、逆に感謝することにしました。無視をされて陰口を言われても、感謝をして過ごしました。すると、今回の日参を終えた後、この問題が一気に解決することになりました。仕事のことで三年ぶりにAさんと話をする機会がありました。何気ない話だったのですが、私は何だか嬉しくなり、ちようど持っていたハンドクリームをプレゼントしました。すると、次の日、Aさんからお返し菓子折りをプレゼントしていただきました。私は想定外のことに一瞬驚きましたが、これはチャンスだと思い、Aさんに謝罪しました。「今まで私が気付かないうちにAさんに色々迷惑をかけてきたのかもしれない。すみませんでした。これを機に仲良くしていただけませんか」と伝えました。するとAさんは、「実は私も本当はあなたとお話したかったのよ。でも機会がなくて、ここまでできてしまった、これからたくさん話そうね」と笑顔で応えてくれました。それ以後、Aさんは私に会う度に笑顔で挨拶をしてくれます。

今回の日参は、娘の浄化のためだったのですが、自分にもご守護をいただき、本当に不思議な体験をさせていただきました。

まだまだ未熟な私ですが、令和三年に聖地で行われた

資格検定研修にて、助師の資格をいただきました。これからも、明主様の言われる世界人になれるように、日々努めていきたいと思っております。

感謝奉告

真の親孝行に、また一歩前進

古賀集会所 H A

世界救世教に入信をお許しただいから、借金の完済に、日家のお墓の建立、ほかにも大神様、明主様から多くのご守護をいただきました。現在は、日々の感謝を忘れぬよう努めながら、健やかに充実した毎日を過ごさせていただいております。



ある日、集会所へ参拝した時に、小澤さんと佐藤さんから、両親の永代祭祀をさせてもらってはどうかと勧められました。また、次のようなことも言われました。「貴方は借金も返して、頑張って貯金もしているけれど、それだけじゃ駄目。きちんと正しいことにお金を使わなければいけないわよ。そういう意味でも、永代祭祀はさせてもらおうべきね」と。正し

いことにお金を使わなければならないというお話は以前、古賀集会所の感謝祭で立石先生が話をされたことでもあり、明主様がみ教えにもあることなので、私は迷わず、両親の永代祭祀を申し込む決意をしました。

思い返すと、母は病院で親戚一同に見送られながら霊界に旅立ちました。しかし、その後、実家は売りに出され、仏壇とお位牌は処分され、遺骨もしばらくは行方不明でした。父の場合は、孤独死だったため、誰も死に目に会えず、また、遺体に腐敗があるので、見ない方が良しと言われたこともあり、最後に顔を見てあげることができませんでした。父の遺骨は私が以前いた児童養護施設の方が納骨してくれました。

このように両親には、長い間寂しい思いをさせてしまったのですが、お墓を建てて、永代祭祀もさせていただいたことで、今の時点では、最高の親孝行ができたのかなと思っております。心から、大神様、明主様に、感謝を申し上げます。

昨年、助師資格拝受のお許しをいただきました。これよりは、より一層、地上天国建設のお手伝いができますよう、精進させていただこうと決意する次第です。ありがとうございます。



神仙郷建設とともに進むひな型の拡大に、さらに取り組む決意を奉告



関西から届いた七色のダリアは、会場を彩った後、能登の被災地に贈られた

箱根聖地は、紫微宮建設に続いて、今夏より仮光明会館新装に着手する。信仰面でも、ひな型拡大を目指して“人のために立ち上がる、人材の育成に努めている。春の芸術祭は、その物心両面の建設に当たる奉告の祭典となった。

『神に愛される』
信徒を目指して春季大祭(熱海)



世界的大災害の発生と世界情勢の変動著しい今日、改めて本教信徒の使命を問い祈りを捧げた



喜び溢れるタイとアメリカの参拝団

4月1日、桜花咲きそろふ瑞雲郷は、春の陽光に包まれる絶好の祭典日和となった。この日、国の内外から参集した信徒は、明主様の“万民を天国に誘わむ、との希いのもと、新年度、また心を新たにして聖地を出発した。

満開の桜の中で春季大祭を斎行（京都）



大和のころを求めて、世界平和と明主様のご理想実現を祈る



快晴に恵まれ、北陸関西エリア、アメリカ参拝団、そして聖地直結の会の関西の会員が参拝

京都平安郷春秋庵に大弥勒様をご奉斎され、昨年より春秋の大祭が始まった。4月7日、快晴のもと、今年も春秋庵にて平安郷春季大祭が斎行され、いづのめ教団北陸関西エリアの信徒を中心に、アメリカ参拝団、聖地直結の会会員が祭典に臨んだ。

身体で感じる聖地の光

阿南グループ SY

三月一日の豊穰祈願祭は、「明主様と聖地に直結する会」に入会させていただいて、初めての参拝でした。和田先生の紹介で、西村代表や本部の先生方とお会いさせていただくことができました。

私は、坐骨神経痛のご浄化をいただいている中での参拝でしたので、聖地に無事に辿り着くことができるのか心配していました。救世会館に入らせていただくと、今まで以上に痛みが強まり、聖地の光の強さを感じました。祭典が始まると、急に左肩が痛くなり、そして重くなりました。ご浄霊をいただいた後も、祭典が終わった後も、左肩が痛く重いままでした。しかし、祖霊月次祭、年祭慰霊祭が終わると、肩の痛みや重さがなくなっていました。とても不思議でした。和田先生にこのことをお話しすると、「左は霊ですね。それは、祖霊様も一緒に参拝されたのではないのでしょうか。祖霊様が喜んでおられるのではないのでしょうか。私も経験があります。証をいただいたのですね」とおっしゃってくださいました。私は、「このような体験は初めてでした。きつと喜ばれているご先祖様の後押しもあつたからこそ、こうして聖地

参拝をさせていただけたのだと、気付かせていただきました。ありがたいことだと思えます。

祭典前は、どんよりと曇っていた空も、祭典後には、青空が広がっていて、ほんとうに不思議でした。和田先生から、「水晶殿へは祭典前に行くよりも祭典後に行つた方がよいでしょう。きつと晴れますから」と言われていましたが、驚くほどの見事な快晴となりました。水晶殿からの景色も本当に素晴らしく、「ここは天国」と思わずにはいられません。まだまだいたらない私ですが、神様からご褒美をいただいたように思いました。

その後続いてMOA美術館を拝観しました。以前と比べると、若い方やカップルで来られている方が多く見受けられ、嬉しくなりました。有名企業や有名アーティストの撮影場所に選ばれていることも嬉しく思います。余談ですが、美術品のショーケースのガラスに、頭をぶつけないよう注意事項が書かれているにも関わらず、頭をぶつけてしまいました。分かっていても頭をぶつけてしまうショーケースのガラスの透明度には、お見事としか言いようがありません。美術品をできるだけクリアに見せる美術館の配慮にも、感謝の気持ちが湧いてまいります。

これからも明主様を信じ、神様に少しでも喜んでいただける信徒に近づかせていただきたいと思います。ありがとうございました。

妻と子の死

明治四〇年（一九〇七年）、岡田商店の発足後間もないころに岡田家に嫁いだタカは、大鋸町に自宅ができるまでの、およそ一〇年というもの、家事を切り回し、店員の世話をし、店の仕事を手伝って教祖を助けた。結婚後一年目に結核になったのも、人に倍する働きのせいである。その結果つい身体に無理がいくことになったのである。

岡田商店の礎が築かれる初期の時代ほど、タカの働きは大きな意味を持っていた。米屋の娘として育ち、商家に嫁いできたタカは、持ち前の積極的な性格で商売に打ち込んだのである。奥から出向いて店員が賑やかに立ち働く店に立つことに、また、月々売り上げが伸びていくことに言い知れぬ喜びを感じたことであろう。明治以後の日本の社会を、陰から支えてきた女性に共通する、勤勉で意欲的な性格の、まさに典型的な内助の功を發揮した主婦であつたといえよう。

ひとつ興味深いのは、タカが嫁にきたそのころから、商売がとんとん拍子に拡張し、タカが亡くなって間もなく、破産をしたことである。タカは、富を呼ぶ強運の星のもとに生まれていたのであろう。したがって、教祖が

世俗的な成功を収めた時代、伴侶となるにふさわしい女性であつたといえるのである。

しかし、華やかな成功の反面、教祖の家庭生活には寂しさがあつた。長い間、子供に恵まれなかったことである。母・登里の亡き後も、姉の志づの遺児・彦一郎を手元に置いて実の子供同様大切に育てていた。タカが猫を非常に可愛がって友禅錦紗（錦糸を織りこんだ縮緬や御召）で着るものを縫ってやったりしたのも、子供のな

い寂しさのためであつた。ところが、もう諦めてしまったころ、タカが妊娠した。結婚後八年目のことである。夫婦の喜びはどれほどのものであつたらう。タカはその時、すでに二七歳、当時の常識では、初産を迎える歳としては若い方ではない。子供の生まれる日を指折り数えるようになって、それまでに味わったことのない喜びと充実感が身内に広がるのを感じたのである。教祖はタカを気づかい、店や家庭のおずらわしさが身体に障らないようにと、しばらくの間、金沢の別荘へ静養にやった。こうして大正四年（一九一五年）一〇月一日、タカはめでたく女の子を出産した。子供は「茂子」と名付けられた。しかし、大変な難産であつた。そのために生まれて間もなく、幼い命は失われてしまった。

夫婦の悲しみは大きく、しめやかな葬儀が行われたが、

その寂しさはいつまでも続いた。

しかしそれから間もなく、タカはふたたび身籠った。ところが、今度こそ無事に育ってほしいという夫婦の願いも空しく、生まれてきた女の子は死産であった。

タカが三度目の子を身籠ったのは大正七年（一九一八年）のことである。三度目の正直という言葉もある。タカは祈るような気持ちで自分の身体を大切にし、教祖もこのうえない心づかいでタカをいたわった。金沢の別荘で静養させたのは今回も同じであった。しかしその努力も空しく、お産を控えてタカは腸チフスにかかってしまい、大変苦しんだ末、大正八年（一九一九年）の六月四日に大鋸町自宅で女兒を早産した。生まれ出た子は未熟児で、生きていく力がなく間もなく死んでしまった。母親のタカも衰弱が激しく、一週間後の六月一日ついに息を引き取ったのであった。

葬儀は岡田家の菩提寺である観音寺で、しめやかなうちにも数多くの供花に囲まれ、盛大に行なわれた。

タカの葬儀が終わった時、応接間に坐って腕を組み、じっと考えこんでいた教祖は「片腕もがれてしまったよ。」と手伝いに来ていたタカの姪・鶉飼花子につぶやいた。常日ごろどんなことがあってもけっして弱音を吐くことのなかった教祖である。よくよくの思いであったのであろう。

教祖はタカの死後、金沢の別荘を義母のいわに無償で譲った。

「私もやがて後添いをもらわなければならぬ。新しい女房と二人でやってこられてはあなたもおいやでしょう。ですからこの家を差し上げます。自由に使ってください。」

と言い、さらに、

「タカが身重の間に、いろいろお世話になりましたから……。」

と、金沢にあった土地も実家に譲ってしまったのである。また、大鋸町の自宅の近くに住む産婆の水留ひさは、これまでタカの出産をすべて世話してくれた人である。今度も夜を日に継いで献身的に働いてくれたその労に対し、タカの死後手厚く謝礼をしたのであった。

…次号に続く『東方之光』（上巻）より



箱根大文字をバックに、はじけ始めた桜の雪



降臨の道の上に咲く桜花



奥津城で参拝者を迎える咲きそめの桜



これから見頃を迎える八重桜

瑞雲郷



水晶殿と可憐な八重桜



救世会館を仰ぐ桜山



MOA美術館で発見された固有種のサクラ・紅瑞雲



相模灘の眺望を演出する満開のソメイヨシノ(ムアスクエアより)

平安郷



春風にそよぐ枝垂れ桜



広沢池畔のソメイヨシノ



平安郷参道のサクラ並木



朝日に輝く枝垂れ花弁



桜花爛漫を迎えた優美な平安郷庭苑

「京都は三段の芸術文化」

高頭 和生



春秋庵と満開の桜

今年二月から始まった奥竹林の美化奉仕は、多くの信徒に支えられ建設が進められています。

三月二十七日は愛知県からバスで二〇名ほどの奉仕者が来られました。八〇代の女性信徒は「昔を思い出して若返って奉仕しています！」と、二〇年数年前、建設奉仕隊に参加していた時のことを思い出して参加したそうで、年齢を感じさせない若々しい声で話してくださいました。

また雨の強い日は庭苑に入れず、館内の清掃など、奉仕者の受け入れ奉仕をしていただいています。さすが、すべてのご用は、世界中の人々が幸せになるため、その模型である聖地の建設につながっているという想念で、皆さんご奉仕をしてくださっています。

世界に目を向けると、大きな自然災害は各地で頻発し、大国の覇権体制が崩壊し始め、世界秩序が歴史的な転換を迫られています。私たち個人の力では、世界を動かすような大きなことはできませんが、三聖地の建設が進むこと、地上天国の模型が完成することで、地上天国が世界中に広まるといふ明主様のお言葉を信じたいと思います。奥竹林や庭苑の美化や、その奉仕者を受け入れるご用は、世界中の人々の幸せにつながっていることを確信しつつ、皆さまと共に平安郷建設に参画させていただきたいと思えます。

前回につづき、昭和二十七年十月二十日に京都劇場でご講話された明主様のお言葉から、京都の文化と一緒に学んでまいりましょう。

(前略) 大体京都の文化は、良く見ると三段になっています。最初は平安朝の平安文化と、それから東山文化すなわち足利時代のもの、桃山文化です。ちょうど藤原、足利、豊臣と三段になっています。この京都の文化というものはそれであり、それから江戸に移って元禄を中心とした華やかな文化時代が生まれましたが、とにかくそれまではちょうど三段階になっています。仏教の方は奈良の方に早くできた文化ですが、そうかといって、今さら新しく仏教文化を採り入れるという必要はありませんが、今の三段階の文化の良い所、特異な所、そういうものを採り入れて、その模倣とってはしようがないですが、やはり現代の二十世紀としての感覚によって、その三段階の文化をよく調和させて、現代の人にもすぐに受け入れられるような、古い懐古主義的なものではなくて、そういった懐古的なものを採り入れるとともに、時代感覚にピタリ合ったようなものを造ろうと思っております。理屈だけ言うと結構ですが、ちょっとこれ人間的には難しいわけなのです。古いものと新しいものとの調和ずれのないようにピタリするようなものを造るといふのは難しいものです。牛車に自動車のエンジンをつけるように難しいものです。それを無理なく、かえって良いというようにするのですが、神様がやるのですから卒そつはないと思います。つまり今までの宗教などはそうですが、神様というのは芸術的には縁遠いもののように思われていたのです。ところが大違いで、とにかく

神様は芸術にはもつとも重きを置いているのです。ただ今までは世の中で芸術的なものを造りたいと思っても、夜の世界で地獄の世界だから、そういうのをこしらえてもしようがないし、条件が揃わないからこしらえないのです。それで最高の神様は時を待たれたのです。いよいよ時が来たので神様は本当の御心を発揮されるわけです。これからは人間の理想としていたようなものがドンドンできるわけです。そんなような意味で、大いに楽しい世の中ができるわけです。(後略)

(昭和27年10月20日 京都劇場)

現在、京都には世界中から多くの観光客が訪れます。日本は高度成長期やバブル経済期を経て、昨今は、観光産業も諸外国に倣い大きく成長しました。戦後まもない当時の様相とは、大きく違うと思います。しかし、明主様の「三段の京都文化」という切り口で京都の文化を楽しんでいる方々は少ないですね。私もこのお言葉を学ぶまでは、有名な寺院を中心に京都観光をしていました。京都には数多くの歴史的文化的遺産がありますが、明主様があげられた、平安文化、東山文化、桃山文化というこのポイントは、日本人の芸術性が大きく発揮された時期で、その作品が残っているということです。それを世界中の人に伝え感じてもらうことで、日本美術を通して芸術性の向上や東洋思想を発信する願いがあったのではないかと拝察いたします。さらに「これら三段の芸術文化

の良いところ、特異なところを調和させ取り入れて、現代の感覚で表現する」ことを願っておられます。しかし「古いものと新しいものの調和は人間では難しい、これは人間がするのではなく、神様がなされる」と、神様中心のご神業を明確に言われています。

そして、条件が揃わないからこしらえないのです。それで最高の神様は時を待たれたのです。いよいよ時が来たので神様は本当のみ心を発揮されるわけです。これからは人間の理想としていたようなものがドンドンできるわけです。と、時期を最高の神様に委ねられておられます。

このご講話から七〇余年が経ちました。平成の平安郷建設を経て、令和の建設が始まりました。いまは、この数年の引き算分を補うような段階ですが、最高の神様が働かれる条件が整えば、新たな段階の建設が始まります。今はまだ具体的になっていませんが、現在許されている平安郷研修センターや岡田茂吉記念館で、明主様が願われていた古い三段階の芸術文化の紹介や、それらと現代感覚を融合した新たな発信をしていくことを願っています。

世界中の人々が幸せになるために、土の聖地平安郷建設を通して明主様にお使いいただき、神様中心の生き方がゆるされますように。

つづく

5月12日 平安郷聖地直結の会信徒集会へのご案内

今年の信仰課題の確認、一人ひとりの信仰実践に神様より力をいただく信徒集会です。お誘い合わせの上、ご参集下さい。

- | | |
|--------|---|
| 10時 | 受付開始 |
| 11時 | 入所参拝 み教え 浄霊
挨拶・課題提起
昼食
座談会 まとめ |
| 14時15分 | 終了参拝並びに祈願参拝 |

ワナの側のオオカミとキツネ

人をおとし入れる人には

人はついて来ない

キツネが人間の仕掛けたワナのそばで考え込んでいました。キツネはワナに仕掛けられた肉の塊が食べたくて仕方がなかったからです。

しかし、もしその肉を食べようとするれば、ワナにかかって痛い目に遭うのはわかっています。だから、さんざん悩んでいたのです。

そこへ、オオカミがやってきて、キツネにこういいました。

「あの肉を食べてもいいかい？」

キツネはどうせ肉が食べられないなら、オオカミの泣きっ面でもみて笑ってやろうという意地悪な考えが頭をよぎったので、こう返答しました。

「ああ、いいよ。ボクは親友のキミのために、あの肉をとっておいたんだからね。さあ、召し上がれ！」



キツネが親切を装ってこういったので、オオカミは早速、肉に手を伸ばしました。

その瞬間、オオカミはワナにはまってしまい、大変痛い思いをしました。ワナにかかったオオカミは、キツネに向かって、こういいました。

「ボクにこんな仕打ちをして喜ぶなんて、オマエには一生友達なんかできやしないよ」

この話は「他人をおとしいれようとしたり、意地悪をすると相手から恨みを買うことになる」と教えています。

逆に「相手の立場になってこうしたら相手は愉快な気持ちになるだろう」とこう振るまえば、相手は喜んでくれるだろう」と相手を喜ばすことを考えている人は、相手からどんどん好かれるようになります。

相手を愉快的な気分させたり、喜ばせられたら嬉しいですね。そのひとつの方法が「笑顔」です。さわやかで明るい笑顔は、それだけで相手をなごませ、愉快的な気持ちにさせます。

四月は進級月です。新しい友人づくりは「よく笑い、よく笑わせる」ことから始めましょう。毎朝、洗顔するついでに、鏡の前で笑顔の練習を行なって下さい。「心のこもった、笑顔がつけれるようになる」と思います。周囲の人に喜びを与える「武器」は笑顔が一番だと信じます。



土筆(つくし)

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



No. 71 2024年4月15日発行

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

